鬼娘

娘⚡稲妻日記

原 俊子

発行・日本図書刊行会
発売・近 代 文 藝 社

著者紹介

原　俊子（はら　としこ）
1936年　生まれ。
1959年　中央大学法学部卒業

鬼　娘

1993年1月20日　第1刷

著　者　原　俊子（はら　としこ）
発行者　福澤　英敏
発行所　㈱近代文藝社
〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869 郵便振替 東京7-68875
定　価　1000円（本体971円）
印　刷　信毎書籍印刷株式会社
製　本　小泉製本所
©Toshiko Hara 1993 Printed in Japan

ISBN 4-7733-1791-4　C0095　P1,000E
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価1000円

目次

1 独り酒 7
2 うちの恵比寿様 9
3 青春 11
4 O君の写真 13
5 私の電話作戦 16
6 親分 18

7 十三夜の姫君 25
8 支払の催促 28
9 Yさんの手術 30
10 ほめられたい症候群 34
11 節分 37
12 文章教室 40
13 花見 43
14 遠い道すじ 47
15 橋の下の饗宴 51
16 アイスクリーム 54
17 夏休み 57

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

18 〝老い〟の新米 59
19 ともだち 62
20 宝くじ 65
21 W君へ 68
22 鬼娘 70
23 バターヒムアップ 73
24 反グルメ 76
25 浴室の色 78
26 夏の休日 81
27 えせヨガ 85
28 私の店 89

29 カード 91
30 犯人 94
31 念力で治るかナ？ 97
32 手作りの歓待 100
33 K 103
34 ゴミの選別 107
35 飴 110
36 電車の中の攻防 116
あとがき 朝日新聞社編集委員 佐藤 悠 121
著者あとがき 123

鬼

娘

独り酒

好物は、酒。独り酒。アルコール中毒かも知れないけれど、毎晩、仕事を了えた後、テレビをつけ、読むこともない新聞を拡げ、若干の粗菜を肴に飲む幸せ。

酒の種類は問わない。いや、正直に言えば、洋酒はあまり肌に合わない。家の床下に、戴き物の洋酒がいろいろあるが、気が向かないと飲まない。

家の者（夫と娘）は、帰りが遅い。これがまた、いい。一人天下。

もっとも、白状すれば、飲む飲む、と言っても沢山飲む訳ではない。ビールは一本も飲めば、ひっくり返りそうになる。

「何？　お酒が好き？　じゃ、今度一緒に飲みましょう」

誰かに誘われると、
「そうですね」
応えながら、内心、困惑する。
飲むと陽気になり、多弁の上に多弁となり、揚げ句失言し、後悔し、数日悩む。
おいしいお酒を、他人に気を使いながら飲みたくない。
店の客に、ある日、私は一人で飲むのが好きだと言うと、彼女は女が一人で夜お酒を飲むなんて、みじめったらしくて嫌だ、と言った。
人を集めて飲むのが好きらしい。パーティーを時々するという。
「そうですか。楽しくていいですね」
相づちを打ったが、店を閉めた後、例によってお酒を飲みながら、一首。

女一人夜酒飲むはみじめという
君は個の自由知らぬ人にや

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

うちの恵比寿様

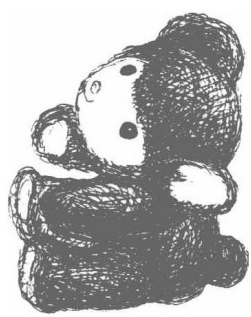
私には、可愛がっているクマの縫いぐるみがいて、毎朝、私に抱かれて棚の上の恵比寿様を、声を張り上げて拝む。

「エービチュちゃん！　おはようございます。今日は、沢山買って帰る、気立ての良いお客様を、いっぱいお願いチマチュ。ママを大金持ちにしてやって下さい」

「図々しい」

髭を剃りながら夫が苦笑する。

この恵比寿さんは、去年の夏、夫と金沢の古物商で見付けたものだ。木彫りの恵比寿さんが煤と埃にまみれて床に転がっているのを発見した時は、嘘



かと思うほど嬉しかった。昔話によく出てくるではないか？　拾って帰った恵比寿様のお蔭で、大金持ちになったとかいう……。

手にとって見ると、少し品はないが実に屈託のない顔で笑っている。値段の折り合いがつかず、いったん店を出たが、どうしても気になって、次の旅先の名古屋から金沢に買いに戻った、いわくつきのものなのだ。私としては財運をもたらす恵比寿様のつもりでいるのだが、毎日の客足はそういいほうではない。

或る日、娘が言った。

「ママ、この恵比寿さん、貧乏連れてくる恵比寿さんじゃないの？」

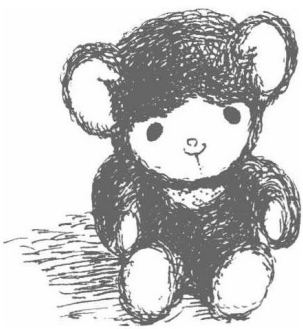
ギョッとして振り返ると、恵比寿様は相変らずニコニコ笑っている。

「まさかね？」

少々疑わしくなったが、いや、そんなことはない、

と、ひたすら毎日、大金持ちになるべく、

虫のいい祈りをクマと唱えている。



青　春

W君はS社の営業マンである。私の店の常連で、同じ会社の若い仲間とよくお茶を飲みに来る。F大出身、長身で礼儀正しい好青年。

仲間にそれぞれ恋人ができたり、近く結婚したりするのに、「僕だけいないんです」と嘆いていた。

その彼が、ほっそりした可愛いお嬢さんを連れてきた。

「彼女？」

と聞くと、

「まだそんな……」

とうれしそうに否定した。

が、じきに「毎日デイトする仲」になってしまったようだ。
それがこの頃さえない顔をしている。
「反対が多くて……」
「どうして」
「子供がいるんです」
「ええっ！」
彼は二十四歳、初婚である。うちの娘と同い年ではないか！
「……あのね、それまずい。いくつ彼女？」
「二十五歳です。二十歳も年上の人と結婚して、離婚しちゃって。……子供五つです」
「……」
「子供、いてもいいんです。……かわいいんですよ、その子」
「ああ……」
店の窓から青空をバックに、花ざかりの庭をとおして改築中の白い立派な

アパートが見える。
「……あんなアパートに住みたいのです」
「ああ……」
ああ、君、それはロマンだよ。……若いんだなあ、君は。胸の中に熱い思いがこみ上げ、私はつぶやく。

ほら、今日も彼はアパートの見える席に座っている。憂いを含んだ横顔で工事の進む様子をじっと眺めて。

O君の写真

朝、食堂に下りていくと、テーブルの上に夫あてのダイレクトメールが封

を切って放り出されていた。
リゾートマンションの広告である。
またか。捨てようと引き寄せると、近頃評判の女社長の顔写真が、ほかの三、四人の人々と小さく載っていた。
「次の方々が弊社の顧問です」
女でも大したものだなあ。手に取ってみようとすると、その横に眼鏡をかけた紳士が並んでいる。
O君じゃないか！　彼だ！　白髪が混じり多少老けているが、あの色白で、はにかみやのお坊ちゃんが、歳月を美しく自分の顔に刻みこみ、品よく立派な男の顔を作り上げている。……うれしかった。何年ぶりだろう。
学生時代、私たちは講義の合間に古本屋をのぞいたり、名画座に行ったりした。私にとっては仲の良い友人にすぎなかったが、彼はそうではなかったらしい。夫と結婚すると知った時、彼は夫の勤める会社の名前など聞きたくもないと去って行った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com